

八幡城遺跡

臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

都城市教育委員会

序

本報告書は開発事業に先立ち実施された埋蔵文化財発掘調査の記録です。

本調査では道路状遺構など中世を主体とする遺構・遺物が確認されたほか、都城跡の周辺部における初めての調査事例となりました。この報告書が行政の一資料としてだけでなく、様々な場で活用され、地域への関心を深める手助けとなれば幸いです。

最後になりましたが、多大なご協力を賜りました各関係機関並びに市民の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

都城市教育委員会
教育長 玉利 譲

例 言

- 1 本書は平成19年度に都城市教育委員会が実施した、宮崎県都城市五十町1058番地2外に所在する八幡城遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は都城市が事業主体となる臨時地方道整備事業「市渓中尾472号線拡幅工事」に伴うものであり、発掘調査から報告書作成にかけての業務は都城市教育委員会が実施した。調査期間は平成20年1月9日～31日 調査面積は157 m²である。
- 3 本書に使用したレベルは海抜絶対高であり、基準方位は真北である。
- 4 本書に使用した遺構断分は次のとおりである。
S-B = 捩立柱建物跡 S-C = 土坑 S-D = 溝状遺構 S-F = 道路状遺構 S-Y = 堆穴状遺構 P = 柱穴
- 5 本書に使用した出土遺物の分類・時期比定は下記文献を参考としている。また遺物説明に記載した文献番号は下記文献と一致する。
文献1 「森山勉「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」」1982貿易陶磁研究第2号
文献2 上田秀夫「14～16世紀の青磁総の分類」1982貿易陶磁研究第2号
文献3 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」1982貿易陶磁研究第2号
文献4 「中世後期における貿易陶磁器の様相」2002日本貿易陶磁研究会
文献5 「概説 中世の土器・陶磁器」1995中世土器研究会編
文献6 「九州陶磁の編年」2000九州近畿陶磁学会
文献7 「愛知県史 別編 陶業2 中世・近世 濱戸系」2007愛知県
6 調査及び報告書作製にあたって次の諸氏・諸機関の御指導・御協力を得た。記して感謝申し上げます。
矢部喜多夫氏・武田浩明氏・米澤光博氏・山下真一氏・米澤英昭氏・久松亮氏・栗山葉子氏・山下大輔氏・加賀淳一氏・下田清海氏・中村友昭氏・武田信也氏・佐々木綱洋氏・大盛祐子氏（都城市教育委員会）
白井健一郎氏（都城市水道局）
都城市道路公園課・都城市水道局・宮崎県教育委員会
7 記録類や出土遺物は都城市教育委員会において保管している。

目 次

I 調査経緯・経過・組織	1	道路状遺構	9
II 遺跡の立地と環境	2	堅穴状遺構	13
III 調査の記録	4	柱穴群	13
1. 地形と層序	4	包含層出土遺物	13
2. 遺構と遺物	4	IV まとめ	14
掘立柱建物跡	6	報告書抄録	16
溝状遺構	6		

I 調査経緯・経過・組織

調査経緯

平成19年9月14日付け都道第166号にて都城市道路公園課より、臨時地方道整備事業「市道中尾472号線」予定地内における文化財の照会が都城市教育委員会文化財課にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「八幡城遺跡」内にあたるため、市文化財課は10月9日に確認調査を実施した。その結果、溝状造構、陶磁器片等の出土が確認され（註1）、市文化財課は市道路公園課に対し平成19年10月12日付け都教文第294号にて、当該地の一部には良好な状態で遺跡が存在している旨を回答した。

この結果を受けて、都城市より宮崎県教育委員会へ平成19年11月28日付け都道第244号にて文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知がなされ、県教育委員会より平成19年12月3日付け0850-7-151にて工事着手前の発掘調査が必要との通知が出された。

その後、県教育委員会通知を基に協議が進められ、補正予算の議会承認を経て、工事により遺跡に影響が及ぶ範囲（157m²）における発掘調査の実施が決定された。

註1 都城市教育委員会2008「八幡城遺跡」『山内遺跡』

調査経過

平成20年1月9日、重機を使用した表土層の除去より調査を開始した。1月11日から12日における人力により遺物包含層を掘下げ、13・14日には遺構検出状況の写真撮影・測量を行なった。また文化財保護法第99条第1項に基づき平成20年1月18日付け都教文第460号にて宮崎県教育委員会に調査着手を報告した。1月13日より29日にかけては遺構の掘下げ、記録作業を実施し、29日には都城市水道局による調査区内水道管の閉鎖・切断が行なわれた。1月30日、調査区全体の写真撮影を実施した後、31日に現場を収集し調査を終了した。発掘調査における遺構実測図の作成は発掘調査作業員の協力の下に近沢恒典が行い、東壁全土層図の作成にあたっては中村友昭氏の支援を得た。遺構等の写真撮影は近沢が実施した。

調査終了後、文化財保護法第108条に基づき平成20年2月5日付け都教文第478号にて都城警察署へ埋蔵物発見の届出を行い、平成20年2月19日付け都教文503号にて県教育委員会に発掘調査の終了を報告した。

整理作業は調査終了直後より開始した。遺構の製図は「トレースくん」（株式会社CUBIC）を使用し近沢、新屋美佳が行ない、遺物実測・製図は近沢、奥登根子が実施した。また遺物写真撮影、本文執筆は近沢が担当し、「Adobe Illustrator CS3」（アドビ システムズ株式会社）を用いて彙集を行った。

調査組織

八幡城遺跡発掘調査の調査組織は以下のとおりである。

平成19年度（調査）

主 体 都城市教育委員会

教育長 玉利謙

教育部長 岩崎透

文化財課長 高野隆志

同主任 新宮高弘

同副主任 矢部喜多夫

同主任 近沢恒典（調査）

同嘱託 斎藤麗子（庶務）

調査作業員 猪ヶ倉卓光 今村まさ子 奥利治

木村七郎 武石重利 永田義晴

平成20年度（整理・報告）

主 体 都城市教育委員会

教育長 玉利謙

教育部長 岩崎透

文化財課長 和田芳律

同副課長 常盤公生

同主任 矢部喜多夫

同副主任 桑原光博

同主任 近沢恒典（整理・報告）

同嘱託 斎藤麗子（庶務）

整理作業員 奥登根子 新屋美佳

II 遺跡の立地と環境

都城盆地は九州南部内陸にあって、霧島火山群の東南の麓、宮崎県南西部から鹿児島県にかけて広がる。その起源は列島形成時の陥没帯とされ、基盤層は四万十類層群である。周縁には標高400m程度の山地が連なり、内部にはシラス台地・成層シラス台地など火山噴出物による地形形成が発達している。周囲より流入する河川群は盆地を南北に貫流する大淀川へと収束された後、北縁山地を抜け宮崎平野へと至る。都城市は周縁山地を含む都城盆地の大半を占め、市街地は盆地底南部の扇状地を中心となっている。

八幡城遺跡は市南部域に位置する成層シラス台地端部に立地している。大淀川と横市川とにより侵食形成されたこの台地は、標高180～190mと東へ緩やかに傾斜しながらも、東西約2km、南北約2kmと広い平坦面をもつ。台地下との比高差は約20mである。台地に係る代表的な遺跡としては北縁の横市川流域において加治屋A・B遺跡、坂元A・B遺跡、平田遺跡など繩文時代～近世にわたる各期の遺跡が確認された横市地区遺跡群と、台地南東端の八幡城遺跡と重なる都城跡が上げられる。また大淀川を挟んだ盆地底では、近世都城の統治機関である領主館の周辺にて中央東部地区遺跡群、八幡遺跡など近世を主体とする調査例が見られる。

都城跡は都城盆地における主要な中世城郭の一つである。台地端部の分割によって各曲輪を形成する「群郭式城郭」であり、人淀川を背後にした本丸から西方へと城域を展開させる。主たる使用期間は1375年（永和元年）から1615年（元和元年）で、基本的には北郷氏（都城島津氏）がその拠点として継続使用している。現在まで城内8箇所における本調査・確認調査が公表され、14～17世紀の遺物と共に、大規模な道路状遺構・樹立柱建物跡など城郭形成に関与する多くの遺構が確認されている。

今回の調査区は大手口「中尾口（大手）」に比定されるJR日豊本線中尾踏切の隣接地にあたる。東側には絵図に見られる空堀が明瞭に残存している。

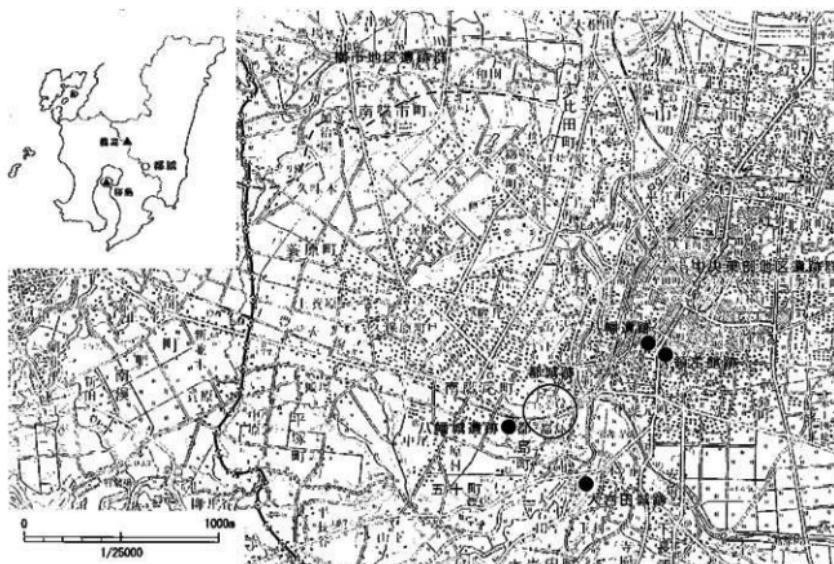
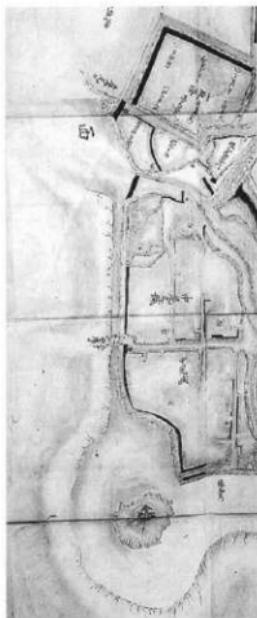
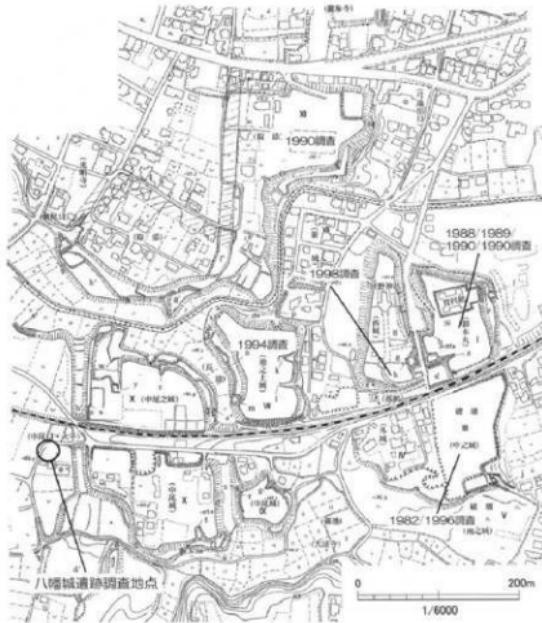


図1 遺跡位置図



竹之下都城御城図（部分）



都城跡平面図（八巻孝夫1991を一部改変）

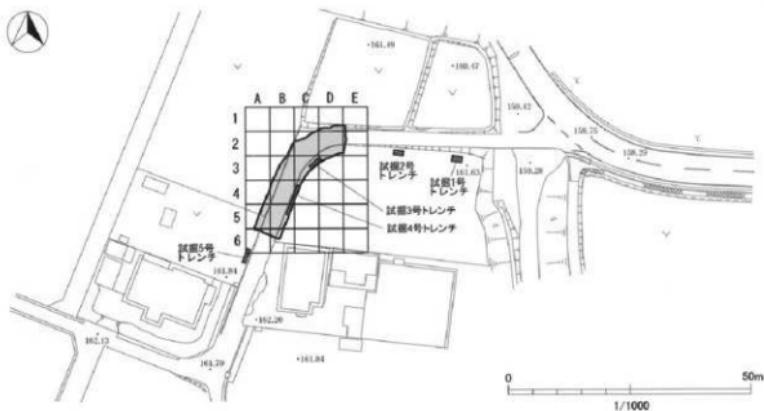


図2 周辺地形・調査区域図

III 調査の記録

1. 地形と層序

本調査区は台地縁辺に位置しており、現地形は調査区南へ東へと緩やかに傾斜する。調査前は舗装道路及び畑地として利用されていた。基本的層序は次のとおりである。

- I層：灰褐色土・・・砂質、現耕作土
- II層：灰色土・・・砂質、桜島文明軽石ごく微量
- III層：黒色土・・・霧島御池軽石ごく微量
- IV層：黒褐色土・・・霧島御池軽石ごく少量
- V層：暗褐色土・・・霧島御池軽石多量、VI層漸移層
- VI層：霧島御池軽石
- VII層：黒色シルト・・・粘質

またVII層底下には鬼界アカホヤ火山灰層が確認され、都城盆地における台地上の基本層序と共通する。肉眼で確認できた火山灰は上位より桜島文明軽石（桜島起源・1471年）、霧島御池軽石（霧島火山御池起源・約4200年前）、鬼界アカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源・約6300年前）の3種であった。（以下、「文明軽石」、「御池軽石」、「アカホヤ」と略記する）

I層は近現代の耕作土に該当する。その直下層はII～VI層であるが、層位の逆転などではなく良好な堆積状況であった。この点から近現代の造成により、南→東へと大きく傾斜していた旧地形が削平され、緩やかな傾斜へと地形改変がなされている状況が想定された。また現道路及び水管による擾乱も遺跡に多大な影響を与えていた。

遺構検出はIII層中～IV層上面が中心となる。だが東壁土層断面ではI層下面にて遺構土層が観察されており、遺構構築時の旧表土面はさらに上位であったと判断される。遺構埋土は灰色がかかった色調とややざらつく砂質的な感触が目立つ。都城盆地における近世遺構の埋土は灰黑色砂質土が主体とされており、本遺跡の遺構埋土と共通性が高い。

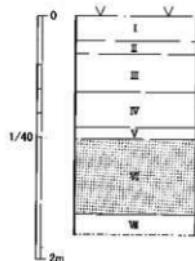


図3 土層模式柱状図

2. 遺構と遺物

概要

出土遺構は調査面積が157m²と少なかったにもかかわらず、掘立柱建物跡1・溝状遺構2・道路状遺構2・堅穴状遺構4・柱穴49・土坑1と多くの遺構が確認された。出土遺物は総数96点で小破片が大半を占め、その時期は縄文時代から近世までと幅広い。

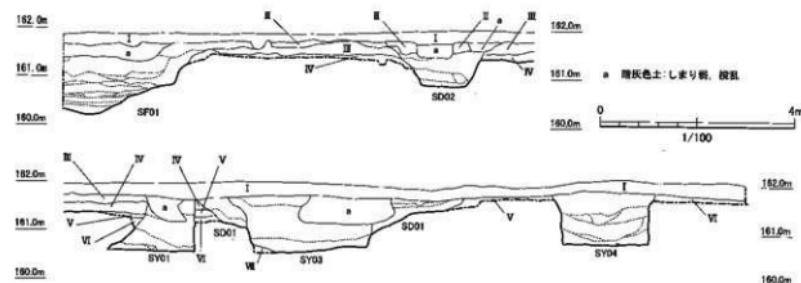


図4 東壁全土層図

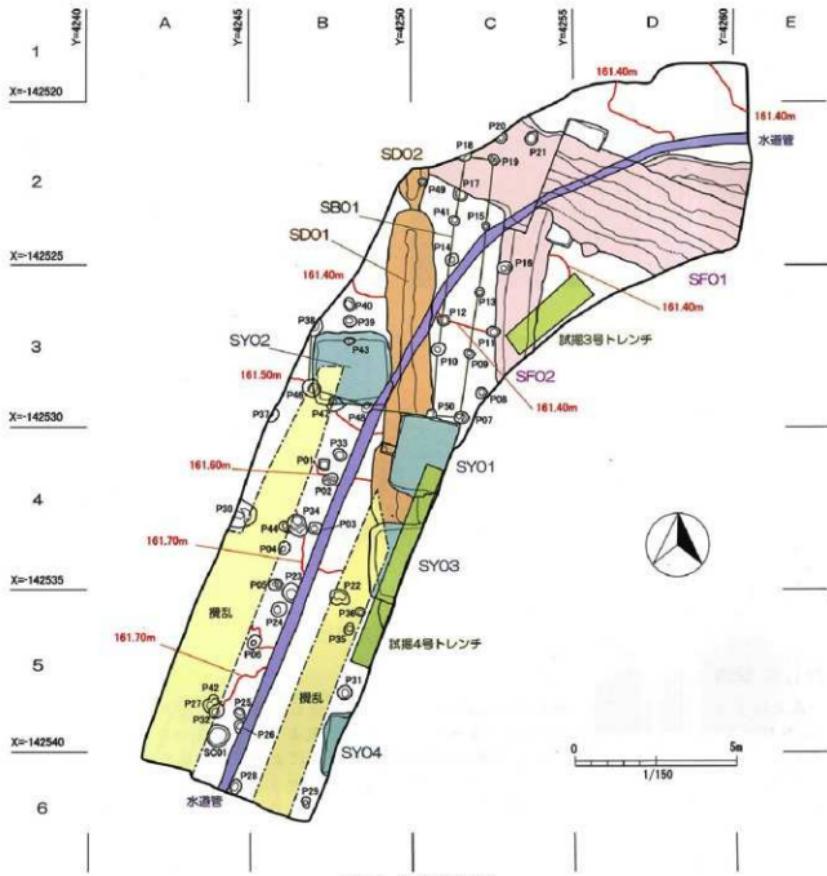


図5 遺構配置図



調査区全貌（北東から）



作業状況 (SF01付近)

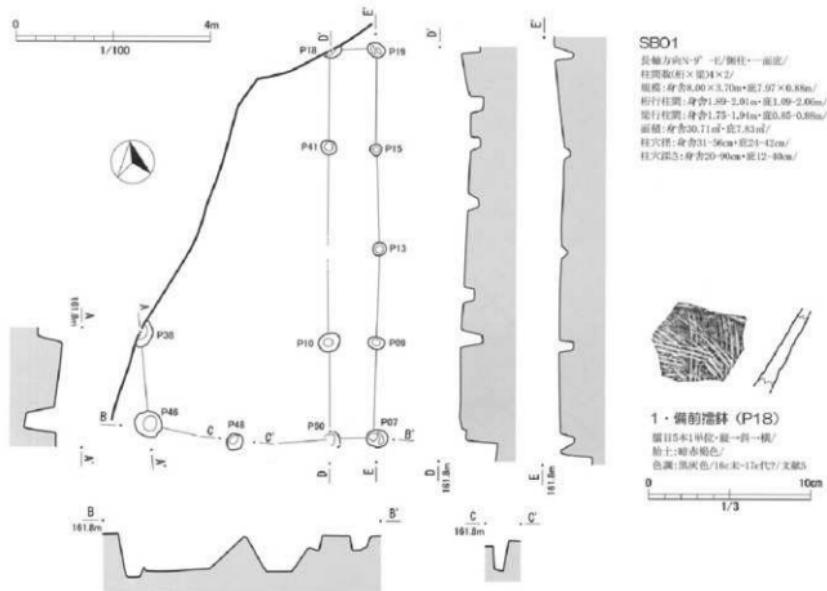


図6 SBO1(本文6P)

掘立柱建物跡 (SBO1:図6)

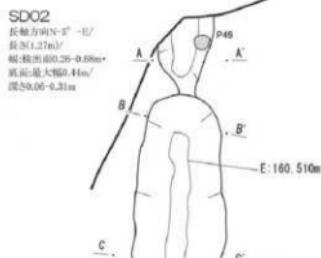
調査区中央にて確認された。調査中には認識できず図上復元した建物跡であり、調査区外へと広がる。SD01・SF01・SY01・02と重複するが、検出状況より SF01 → SBO1, SBO1 → SY02と捉えられる。また P10・41間の柱穴は水道管敷設により破壊されていると考えられた。

建物の長軸方向は南北、桁行4間、梁間2間、東側に庇をもつ。P18より16世紀末～17世紀代と考えられる備前櫛鉢片1点(1)、18世紀代と考えられる薩摩碗小片1点、壁土の一部と考えられる粘土塊3点が出土している。

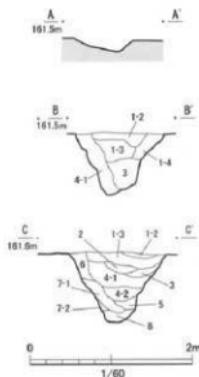
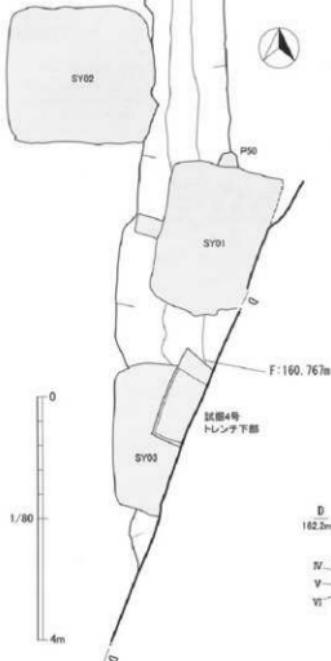
溝状遺構 (SD01・02:図7)

調査区中央にて検出された。SD01・02は始点にて接し、相対方向に調査区外へと伸びる溝である。長軸・南北方向は東側空堀の方向軸と共に通し、空堀と連動する区画的な役割が考えられた。SD01・02の前後関係は不明であるが、隣層上面を底面の中心とする台形状断面の01に対し、02はVI層中で浅く皿状であるなど形状は異なる。共に遺物は出土していない。

SD01はSY01～03・P50と重複するが、検出状況及び土層断面観察より SD01 → SYと捉えられる。埋土は基本的にほぼ同一の様相である。実測図には反映されていないが、土層C-C'の最下層3・4・1層直下にて薄い11層の堆積が確認されている。また1～3層・4層・5～8層の分層状況より、複数回の掘削も想定されるが、埋土は同一相を示すため、その確実性は低いと考えられた。E-F地点の高さと距離8.65mより求められた平均勾配は3%で、北へと下る。この勾配は地形の傾斜と整合し、地形に沿った構築と理解された。また未開放の方向へ傾斜している点、浸透性の低いと考えられるVII層が底面となる点からは、一定期間の帶水が予想される。だが土層堆積にその様相は認められないため、溝内への水の浸入は経緯であり、掘削後早急に埋め戻された可能性が考えられた。



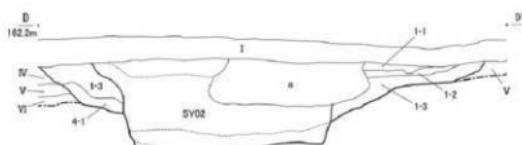
SD01 (北から)



SD01・O2 (北から)

SD01

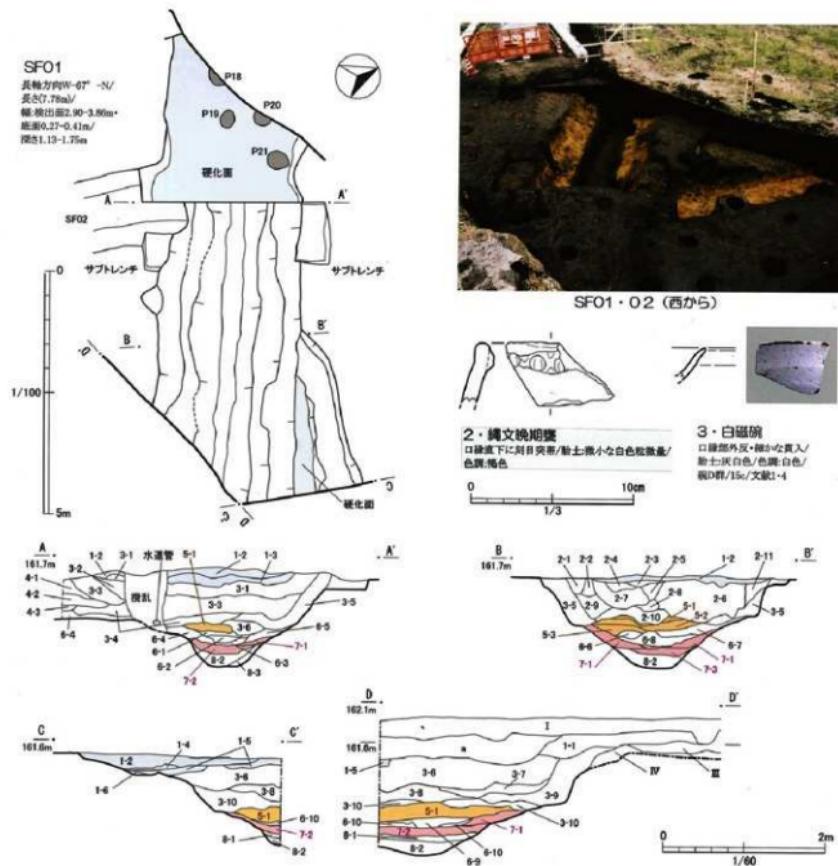
長軸方向N-1°-E/
長径1.17m/
幅(柱)0.84-1.12m/
底面0.18-0.96m/
深さ0.71-0.86m



- I-1 黒褐色土・じし状地、御池軽石・文明輕石混在
- I-2 黒褐色土・じし状地、文明輕石少量
- I-3 黑褐色土・じし状地、文明輕石ごく少量
- I-4 黑褐色土・じし状地、御池軽石・文明輕石ごく微量
- 2 黑褐色土・じし状地、御池軽石・文明輕石ごく微量
- 3 黑褐色土・じし状地、文明輕石やや多量
- 4-1 黑褐色土・じし状地、御池軽石・文明輕石ごく微量
- 4-2 黑褐色土・じし状地、御池軽石・文明輕石ごく微量

- 5 黑褐色土・しまり地、御池軽石少量
- 6 黑褐色土・しまり地、御池軽石ごく微量
- 7-1 黑褐色土・しまり地、御池軽石・文明輕石少量
- 7-2 黑褐色土・しまり地、御池軽石少量
- 8 暗灰褐色土・しまり地、御池軽石・文明輕石少量

図7 SD01・O2 (本文6P)



- 1-1 黒灰色土:しまり無、御池軽石・文理軽石ごく微量
1-2 黒色土:硬質、御池軽石・文理軽石ごく少量-第1硬化工層
1-3 黒灰色土:硬質、御池軽石・文理軽石ごくや多量-第3硬化工層
1-4 離散色土:しまり無、文理軽石ごく微量
1-5 黒灰色土:硬質、御池軽石ごく微量、文理軽石ごく少量-第3硬化工層
1-6 黒灰色土:しまり無、御池軽石ごく微量
2-1 黒灰色土:しまりや少強、文理軽石ごく多量
2-2 離散色土:しまりや少強、御池軽石・文理軽石ごく多量
2-3 黒灰色土:しまり強、御池軽石
2-4 黒灰色土:しまり強、御池軽石・文理軽石微量
2-5 黒灰色土:しまり強、御池軽石・文理軽石微量
2-6 黒灰色土:しまりや少強、御池軽石・文理軽石少量
2-7 黒灰色土:しまりや少強、御池軽石ごく微量
2-8 黒灰色土:しまりや少強、御池軽石・文理軽石微量
2-9 黒灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石微量
2-10 黒色シルト:しまりやや少強、文理軽石微量
2-11 黑褐色土:しまり弱、文理軽石ごく少量
3-1 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石ごく微量
3-2 黑灰色土:しまりや少強、御池軽石ごく少量
3-3 黑灰色土:しまり弱、文理軽石微量
3-4 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石微量
3-5 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石微量
3-6 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石ごく少量
3-7 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石ごく少量
3-8 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石ごく微量
3-9 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石ごく微量
3-10 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石ごく微量

- 4-1 黒灰色土:しまりや少強、御池軽石・文理軽石ごく少量=SFO2
4-2 明灰色土:しまり弱、文理軽石少量=SFO2
4-3 黑褐色シルト層厚約2cmブロック=SFO2
5-1 噴灰色土:硬質、文理軽石少量-第2硬化工層
5-2 黑灰色土:硬質、御池軽石・文理軽石ごく少量-第2硬化工層
5-3 黑灰色土:硬質、御池軽石ごく微量-第3硬化工層
6-1 黑灰色土:しまり弱、御池軽石層厚約15cmブロック少量
6-2 噴灰色土:硬質、御池軽石・文理軽石ごく微量、下部に砂層、上部に硬化工層
6-3 噴灰色土:硬質、御池軽石ごく微量、上部に硬化工層
6-4 黑灰色土:しまり弱、御池軽石ごく微量=SFO2(13層)
6-5 黑灰色土:しまり弱、御池軽石ごく微量
6-6 黑灰色土:しまり弱、御池軽石ごく微量
6-7 黑灰色土:しまり弱、御池軽石微量
6-8 黑灰色土:しまりや少強、御池軽石・文理軽石ごく微量
6-9 黑灰色土:しまり弱、御池軽石・文理軽石微量
6-10 黑色シルト層厚約2cmブロック

図8 SFO1 (本文9P)

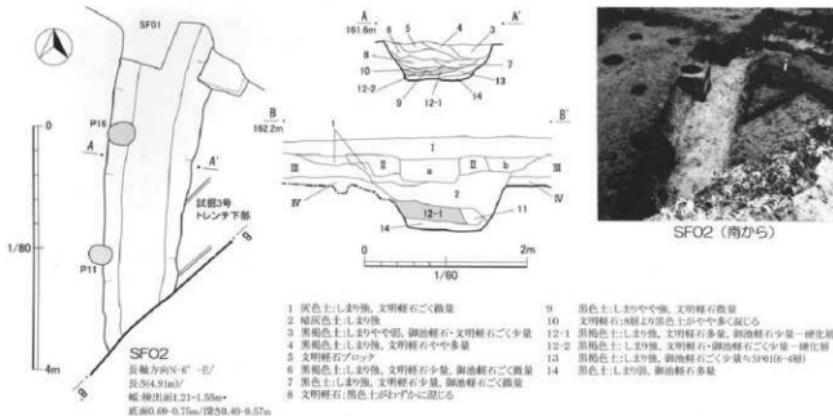


図9 SF02 (本文9P)

道路状遺構 (SF01・02: 図8・9)

調査区北東より検出された。SF01・02共に溝状遺構内に硬化層が形成される道路状遺構である。互いに接する両者の位置関係と硬化層の状態からは、少なくとも3回の形状変更が想定された。

他遺構との関係ではSB01等の柱穴(P18~21)との重複が確認され、検出状況からSF→柱穴と捉えられた。SF01の西部は柱穴と重複していたため、検出面である硬化層上面に留め、底面までの掘下げは行なっていない。

SF01は緩やかな段をもち、底面がごく狭い台形状の断面形態で、掘削はV-VII層まで至る。埋土は硬化層3枚(1・7・7層)とその間層3枚(2・3・6・8層)に大別される。硬化層は下位より第1~3層硬化層として記録したが、各硬化層内でも土質により数層に細別され、各細別層内でも数枚の硬化面が確認された。間層はざらつく砂質的な感触で、下位ほどブロック状のV・VII層が目立つ。

第1・2硬化層は溝の下位に位置し、その長軸方位はほぼ同じであり、溝状遺構の段差部に形成される。底面と第1硬化層との間層(8層)には文明軽石が含まれるため、使用初期である第1硬化層の形成は15世紀後半以降と判断される。第1・2硬化層間の間層(6層)は薄く、一部には硬化面をもつ層(6-2・3層)も確認される。そのため第1硬化層形成後、使用が減少しながら土砂が自然堆積し、その後頻繁な使用が再開され第2硬化層の形成に至ったと考えられた。第2硬化層と第3硬化層との間層(2・3層)は約50cmと厚い。堆積状況は自然堆積とは捉えられず、第2硬化層を人為的に埋めた後、第3硬化層が形成されたと考えられた。また第3硬化層は前硬化層とは方向がやや北へと振れており、何らかの理由により新たに方角を変えて道路を付け替えた可能性が高い。

遺物は縄文時代晚期土器片3点(2)、白磁碗片1点(3)、青磁小片1点、土器小片2点が出土している。縄文時代の遺物は遺構上位からも出土しており流れ込みと考えられる。

SF02はSF01と比べ規模が小さく浅い。断面形態は幅広の台形状で、VI層中に構築されている。底面直上層のひとつである13層はSF01第1硬化層直上6-4層と共通しているが、硬化層はそれよりも上位にて1層(12層)が検出された。この硬化層はその位置関係よりSF01の第2硬化層とほぼ同時期の形成と考えられ、SF01から南へと延びる分岐路的な道路跡と捉えられる。だがSF01ほどには固く締められてはおらず、平面的に確認できない部分もあり、長期間の使用とはみられない。またSF02の長軸・南北方向はSD01及び東側空堀の長軸と共にし、関連が想定される。遺物は出土していない。

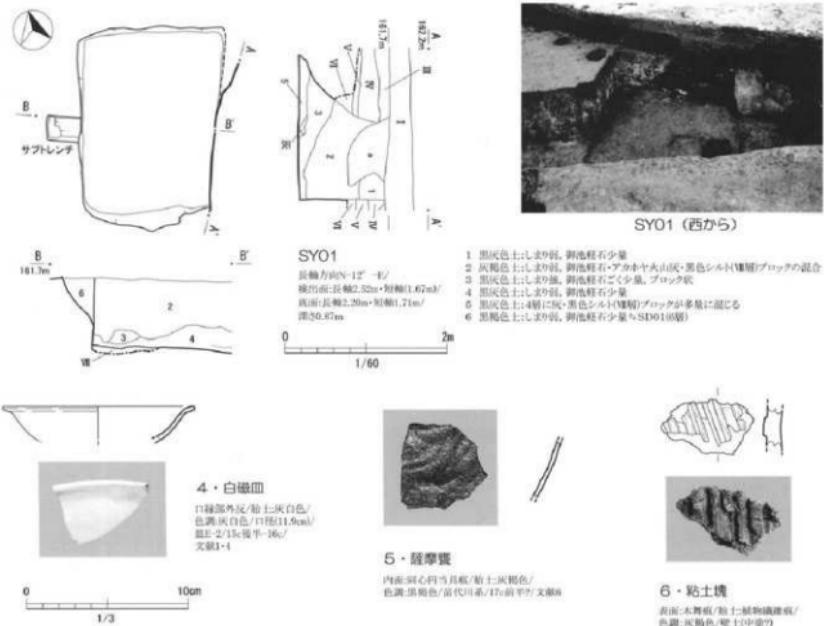


図10 SY01(本文13P)

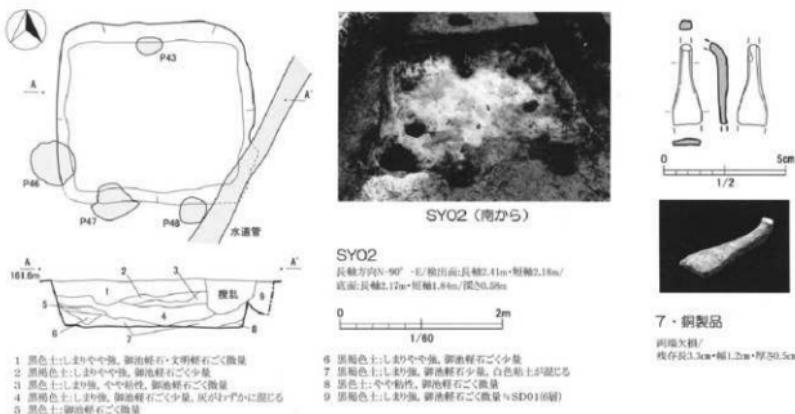


図11 SY02(本文13P)



図12 SYO3 (本文13P)

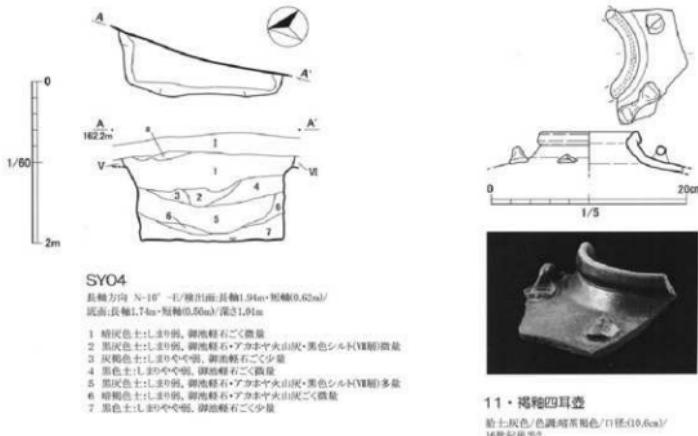


図13 SYO4 (本文13P)

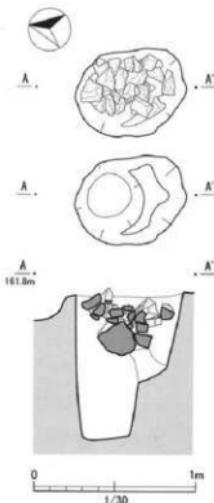
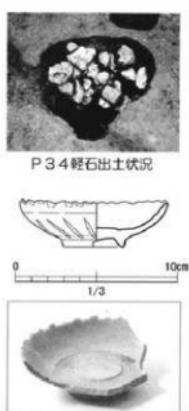


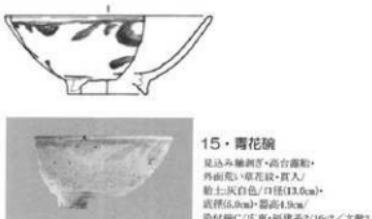
図14 P34 (本文13P)



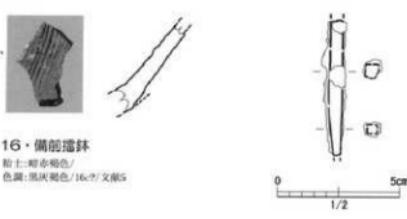
13・青磁碗 (P 4.3)
口縁底外反/胎土灰色/色調:青灰地/
能泉系/碗D瓶/14-15c/文獻2-4



14・
瀬戸・美濃系天目茶碗
(P 3.2)
胎土:灰地/色調:黒褐色/
口径:12.0cm/高:16-17cm?/文獻2



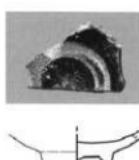
15・青花碗
見込み縫割び・高台露胎。
外面灰・草花紋・肩入。
胎土灰白色/口径(13.0cm),
底径(6.0cm)/器高(4.9cm),
蓋付(Φ10cm)/底裏・福建系/15c?/文獻3



16・備前窯
胎土:暗赤褐色/
色調:黒灰褐色/文獻5
0 5cm
1/2



17・肥前系染付皿
口縁端部が把束し方びに外反・内面格子文/
胎土灰白色/口径(13.0cm)/18-19c?/文獻6



18・薩摩碗
見込み縫の目縫割び・高台露胎・高台見込みに兜山/
胎土:赤褐色/色調:暗茶褐色/底径(4.0cm)/
18-19c?/文獻8

図16 包含層出土遺物 (本文13P)

竪穴状遺構 (SYO 1~04: 図 10~13)

調査区中央～南にて検出された、方形もしくは長方形の竪穴である。検出面からの深さより SYO 1・03・04 と SYO 2 とに大別される。SD 01 や柱穴数基と異なるが、検出状況・七層断面観察から SD 01 → SYO 1~03、P 43・46~48 → SYO 2 の関係と捉えられた。出土遺物は 16 世紀～17 世紀前半を中心とする。

SYO 1・03・04 は深さが約 1m、VI 層まで掘削されたやや深い竪穴である。一辺の最大長の差より 2.5m 程度の 01・03 と 2m 程度の 04 に細別されるが、凹凸の少ない直線的な壁面など全体的な形状は共通する。土層堆積状況からは自然堆積ではなく、人為的に埋められた状態と考えられた。また 01・04 は埋土にアカホヤ火山灰が認められるが VI 層中までの掘削であり、他のより深い遺構の堆土を使用した可能性がある。SYO 1 では青磁小片 1 点、白磁皿片 1 点(4)、青花小片 1 点、薩摩窯小片 7 点(5)、粘土塊 1 点(6)、銅鏡小片 1 が出土している。5 の薩摩窯は器壁が薄く、内部に同心円当具痕が残り 17 世紀前半と考えられた。また 5 に類似する薩摩窯小片が 7 点と最も多い。SYO 3 では青磁小片 2 点、青花片 2 点(8)、瀬戸・美濃系天目茶碗片 1 点(9)、中世土師器片 2 点(10) が出土している。SYO 4 では褐釉四耳壺片 1 点(11)、備前窯小片 1 点が出土している。

SYO 2 は SYO 1・03・04 と異なり、深さが約 60cm、VI 層までの掘削の浅い竪穴である。埋土は 01・03・04 とほぼ同じ様相であるが、若干灰色味が薄い。遺物は用途不明の銅製品 1 点(7)のみである。

柱穴群 (図 14・15・表 1)

SFO 1・02 以東を除く調査区の全域より総計 49 基の柱穴が検出されたが、SB 01 以外は建物跡としては成立させられなかった。SB 01 構成柱穴を含め、6 基の柱穴より軽石塊を含む 39 点の遺物が出土している。

P 34 は調査区南側 B-4 グリッドにて検出された。平面形態は椿円形、中位南側に段をもち、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は上部より軽石塊 30 点と下部より白磁菊皿 1 点(12) が出土した。軽石塊は意図的な積載ではなく、乱雑に投棄されたような状態であった。

その他の柱穴からは青磁碗片(13:P 43)、瀬戸・美濃系天目茶碗片(14:P 32) のほか、備前窯小片 1 点(P 3 12)、SYO 1 出土薩摩窯に類似する小片 2 点(P 26)、繩文時代土器小片 2 点(P 17)、中世土師器小片 1 点(P 3 2)、鉄さい 1 点(P 3 1) が出土している。

包含層出土遺物 (図 16)

遺物包含層である II・III 層からは、16 世紀代の青花碗(15) から 18・19 世紀代と考えられる肥前系染付け(17) や薩摩碗(18) など総計 22 点の遺物が出土した。

内訳は船載陶磁器では青磁 1 点、青花 1 点、国産陶磁器では備前 2 点、薩摩 6 点、肥前系 1 点、埴地不詳 3 点、土師器小片 2 点、鉄片を含む鉄製品 5 点、石製品 1 点である。国産陶磁器においては、図化はならなかつたが新相を示す薩摩小片が 4 点と比較的多い。

番号	直径(m)	知徑(m)	深さ(m)	備考
P1	0.33	0.31	0.39	
P2	0.47	0.32	0.60	
P3	0.37	0.36	0.52	
P4	0.41	0.35	0.79	
P5	0.40	0.34	0.37	
P6	0.45	0.35	0.47	
P7	0.42	0.32	0.35	SB01
P8	0.34	0.31	0.21	
P9	0.33	0.22	0.29	SB01
P10	0.20	0.37	0.43	SB01
P11	0.39	0.3	0.61	
P12	0.35	0.32	0.21	
P13	0.27	0.26	0.13	SB01
P14	0.41	0.33	0.20	
P15	0.24	0.23	0.11	SB01
P16	0.43	0.36	0.58	
P17	0.42	(0.31)	0.33	[陶土器]
P18	0.39	(0.16)	0.36	SB01 青磁 蘭葉 花丸
P19	0.36	0.27	0.48	SB01
P20	0.32	(0.26)	0.46	
P21	0.44	0.35	0.47	
P22	0.63	0.5	0.66	
P23	0.6	(0.4)	0.90	
P24	0.19	0.12	0.94	
P25	0.36	0.31	0.41	
P26	(0.31)	(0.3)	0.15	備前
P27	(0.29)	(0.27)	0.40	
P28	0.34	0.37	0.62	
P29	0.33	0.2	0.36	
P30	(0.89)	(0.89)	0.92	
P31	0.44	0.43	0.75	萩窓
P32	0.48	(0.38)	0.75	瀬戸・美濃系 椿葉 土師器(中型)
P33	0.32	0.37	0.87	
P34	0.70	0.54	0.86	白磁・輕石塊
P35	0.37	0.29	0.48	
P36	0.27	0.25	0.39	
P37	0.45	(0.22)	0.38	
P38	0.56	(0.36)	0.42	SB01
P39	0.4	0.36	0.43	
P40	0.41	0.3	0.16	
P41	0.31	0.28	0.30	SB01
P42	(0.33)	(0.40)	0.25	
P43	(0.31)	(0.21)	0.28	青磁
P44	0.31	(0.29)	0.56	
P45				欠番
P46	0.54	0.54	0.85	SB01
P47	0.59	0.43	0.86	
P48	0.34	0.33	0.62	SB01
P49	0.34	0.22	0.63	
P50	(0.33)	(0.27)	0.28	SB01
SC01	0.48	0.46	0.18	

表 1 柱穴・土坑計測値一覧

IV まとめ

都城跡は薩摩・大隅から上る主要道が都城盆地へと入る場所にあり、盆地における最重要城郭の一つである。主たる使用期間は永和元年(1375)から元和元年(1615)、文献上では天文年間(1532～1555)、文禄4年(1595)～慶長5年(1600)の2度にわたる築城が認められる(栗原1999)。城内出土の調査事例からは、上紀年代と若干差はあるが、年代が下るにつれ城域が拡大する様相が描かされている(栗原1999)。城外では「中尾口(大手)」より北西へ約300m付近と想定される「本町」「三重町」「後町」にて16世紀代より町屋が形成され、「本町」は鹿城に伴い、「三重町」「後町」は幾度かの変遷を経て元禄5年(1692)に領主館周辺へと移転している(栗原1999・都城市2005)。

本調査区は「中尾口（大手）」比定地の城外隣接地にあたり、城郭本体と町屋とをつなぐ場所と位置付けられる。

遺物 総計96点が出土したが、その多くが小片であり圓化掲載できたものは19点に留まる。総出土遺物の内訳は土器類12点、陶磁器類39点、金属製品8点、粘土塊4点、石・軽石33点、炭化物1点である。土器類については繩文晩期土器小片5点、中世と考えられる土器師壺、小皿の小片が7点であった。

	如意地密露								如意地密露								
	白蘿 (W) 白蘿 (W-N)	白蘿 (W-N)	青蘿 (W-G)	青蘿 (後青蘿)	青花 (後青蘿)	青花 (後青蘿)	鴉鶴 鴉鶴	鴉鶴 鴉鶴	蜜蘭 蜜蘭	蜜蘭 蜜蘭	淑戶-美 淑戶-美	淑戶-美 淑戶-美	蘭摩 蘭摩	蘭摩 蘭摩	蘭摩 蘭摩	蘭摩 蘭摩	蘭摩 蘭摩
SF01	1				1												
SY01		1				1		2						5			
SY03			2			1	1					1					
SY04									1		1						
P182301	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1					1	—	—
P26														1			
P32																	
P34			1														
P43			1														
如意露						1	1			1	1		1	1	2	1	1
計	1	1	1	1	6	1	1	3	1	2	3	2	7	1	3	1	1

表2 圓磁器器種一覽(註1)

单位：(点)

陶磁器類の内訳は表2のとおりである。判別不能であった青磁・青花・不明の項を除いた28点の觀察より、遺跡の総体的年代は15世紀代まで上る白磁碗D群、青磁碗D類から18～19世紀代の慶摩壺B～肥前系藍付皿までの間と捉えられた。さらに16世紀～17世紀代に含まれる製品が19点と最も多く、主体時期は16～17世紀代と考えられた。また陶磁類の中には褐釉四耳壺や漁戸・美濃系天日茶碗など、小片・少量ではあるが、一般集落ではみられない上位階層的な遺物も含まれている。これら遺物の年代観や特徴は城内過去の調査事例（福井市2006・糸賀光耀1999）と共通している。

遺構　掘立柱建物跡 1、塗抹遺構 2、道路状遺構 2、窓穴状遺構 4、柱穴 19、土埴 1 が確認された。

遺構の重複関係には SF01-02, SF01→SB01→SY02, SF02→P11・16, P43・46～48→SY02, SD01→SY01・02・03がある。相対的に SF01・02が古相、SY01・02・03が新相を示し、SB01(柱穴群)はその中間と把緯された。

遺構内出土遺物と遺構の状況をみると、S F 01 は白磁碗D群と陶磁器類の中で最も古く重複関係と整合する。また使用初段階である第1硬化層は15世紀後半以降の形成と認識されている。S D 01 は無焼物であるが、S D 01・S F 02 は平行する位置関係、短い使用期間が共通する点より、両者の同時期性は高いと考えられる。SYは16世紀～17世紀前半の遺物を出土している。01・03・04と02とに形態差が観察されるが、重複関係ではいすれも新相を示しているため、17世紀前半の形成と把握される。S B 01 は18世紀代の陶摩輪も出土しており SYとの重複関係と整合しない。S H 01 は圓上復元の建物跡であるため、確実性が劣る点は否めない。だが柱穴群全体では備前・薩摩製品など16～17世紀の遺物が多く、S B 01 を含めた柱穴群全体が、全時期にわたりながらも16～17世紀を中心とする建物群を形成していた可能性は強いと考えられる。

上記の様相より S E・S D を古(15世紀後半以降)、S Y を新(17世紀前半)、柱穴群を16～17世紀

を中心とする複数期（15～18世紀）と把握し、遺物の様相が城内と共通性を持つ点より、本丸跡調査での時期設定：Ⅰ期14世紀中頃～15世紀初頭・Ⅱ期15世紀代・Ⅲ期16世紀代・Ⅳ期16世紀末～17世紀前半（都城市2006）を取り入れ、次のように整理したい。

A期15後半～16世紀代：S D O 1・S F O 1・O 2・柱穴群等本丸跡Ⅲ期

B期16世紀末～17世紀前半：S Y O 1～O 4・柱穴群の土体等本丸跡Ⅳ期

C期18～19世紀代：柱穴群

まとめ A期の主要遺構は道路状遺構・溝状遺構であった。

「中尾之城」確認調査では、文明軽石の状況より「中尾之城・中尾城曲輪及び空堀の構築」が「15世紀後半よりも後」と指摘（柴畑1999）されており、S F O 1第1硬化層形成時期との共通性は高い。S D O 1・S F O 2は東側空堀と平行する点より、空堀形成後の構築で、城郭と関連した区画的な目的が考えられた。そのためA期の遺構は「15世紀後半以降の城郭拡大」による運動する可能性が強いと考えられ、道路の形成（S F O 1）から溝・道路による区画（S D O 1・S F O 2）、道路の付け替え（S F O 3・第3硬化層）など城郭に関与する開発が開始・継続された時期と把握された。

また確認調査のトレント土層断面（都城市教育委員会2008）からは空堀に向かう旧地形の傾斜が確認されており、自然地形を利用した空堀構築であった可能性は高い。

B期はA期とは一転し柱穴群と堅穴状遺構で構成され、不確定要素はあるがS B O 1などの建物群が主体となる。A期の様相及びB期の終末が廃城と同時期である点より、B期についても城郭と関連した建物群との推定も成立立つ。

文化・文政年間（1804～1829）の編纂資料「庄内地理志 卷27」「来住口下長飯 三重町」の項には「子今八幡城に市場と唱候所有、此所え三町（註2）より式日に罷出、御城内上諸用相敷候」とあり（都城市2003）、天正14年（1586）以降の状況とされる（註3）。この記述からは城郭周囲への経済活動の場の拡大が想定され、施城や町場移転を考慮すると、この経済圏も17世紀前半には終息していた蓋然性は高い。

B期に形成される建物群の性格については現時点では不明とせざるをえない。だが遺物の状況からは上位階層の存在が想定されるため、「城郭に直接関与する建物」「経済活動に付随する建物」の2種には集約されると考えられた。

C期には遺構・遺物共に減少する。「庄内地理志 卷65」「南郷西五拾町村現地野方小名」の項には「八幡城 出野」とあり（都城市2003）、「庄内地理志 卷68」「都城中尾口 五拾町之産」の項には「八幡城」「野屋敷」とある（都城市2003）。この記述は同書編纂期の状況とされ、「野屋敷」とは武士階級による閑観地的別邸とされる（註4）。そのためC期にみられる遺構・遺物の減少は、文献にある畠地主体の土地利用の反映との把握が妥当と考えられた。

今回の調査区は都城跡と町場とをつなぐ場所にあたり、城郭周辺における初めての調査事例であった。その成果としては、明確な遺構・遺物判別の不足などの問題はあるが、15世紀後半以降の開始から16世紀末～17世紀前半の転換を経て19世紀代の畠地に至る、城郭と連動した土地利用の基礎的把握が挙げられる。今後の課題としては15世紀後半から16世紀にかけての開発内容、文献資料も含めた町場・経済圏と城郭との関係などがあり、また今回の調査では小片・少量ながら縦文時代遺物も出土しており、今後の調査にあたっては当該期の遺構にも配慮する必要が考えられた。

註1 国產陶器の年代に関しては備前焼鉢・碗：16世紀～17世紀代、瀬戸・美濃系：16～17世紀代、高麗焼A：17世紀前半、高麗焼B～肥前系染付皿：18～19世紀代と考えている。

註2 「本町」・「三重町」・「後町」を指す。

註3 米澤英明氏・山下真一氏の御教授による。

註4 山下真一氏の御教授による。

参考文献

都城市教育委員会1989「都之城本丸跡」「昭和63年度発掘調査報告」
都城市教育委員会1991「都之城本丸跡（主郭部）」「平成2年度遺跡発掘調査報告」

都城市教育委員会1998「都之城本丸跡」「都城の中世遺跡」

都城市教育委員会2008「八幡城遺跡」「市内遺跡」

都城市2005「都城山史（都之城跡）」「都城山史 資料編、考古」

柴畑光博1999「都之城の城壁について」「吉崎郡中近世城跡緊急分布調査報告書Ⅱ」宮崎県教育委員会

報告書抄録

ふりがな	はちまんじょういせき					
書名	八幡城遺跡					
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第91集					
編集者名	近沢恒典					
編集機関	都城市教育委員会事務局文化財課					
所在地	宮崎県都城市菖蒲原町19-1					
発行年月	2009年3月					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
八幡城遺跡	都城市 五十市町1058番地2外	31° 42' 52"付近	131° 02' 41"付近	2008.1.9-31	157m ²	道路拡幅
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	
散布地	中世	掘立柱建物跡1・構造遺構2・道路状遺構2・ 竪穴状遺構4・柱穴49			舶載陶磁器・国産陶磁器・土師器・ 銅製品・鉄製品	

都城市文化財調査報告書第91集
八幡城遺跡
臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
2009年3月 発行
編集・発行 都城市教育委員会事務局文化財課 宮崎県都城市菖蒲原町19-1 郵便番号886-0034 電話番号(0986)23-9547
印刷・製作 株式会社 都城印刷 宮崎県都城市早野町1618番地 郵便番号886-0056 電話番号(0986)22-4392